

[エッセイ]

20世紀のわが同時代人

三浦 義彰

(37) 三浦謹之助

三浦謹之助（みうら・きんのすけ、1864-1950年）：福島県生まれ。福島小学卒業後上京（1877年），啓蒙学舎でドイツ語修得後，1878年東京大学予科入学，1887年東京大学医学部本科卒業，1887年ベルツの助手となる。1889年有栖川宮，前田侯爵のお供でパリに赴く。ベルリン大学ゲルハルト教授のもとで内科研修，その後パリのシャルコー教授のもとに移り神經病学研修（1892年）。1893年東京帝国大学講師，1894年助教授に昇任，1895年教授に昇任。1912年宮内省御用掛として明治天皇拝謁。1919年パリ講和会議隨員。1921年皇太子殿下御渡欧隨員。1923年ロックフェラー財団の招きでアメリカの医学施設の見学。1924年定年退官し，同愛記念病院院長。1949年文化勲章受章。1950年脳卒中で急逝。

前回に引き続き近親者ことで恐縮であるが，三浦謹之助は私の父で，私は父が51歳，母が41歳の晩年の子で次男である。父は19世紀に生まれたが，その活躍の舞台は20世紀であるし，父は晩年になって貴重な懐旧談を残しているが，その大部分は発行後間もなく戦火に焼かれてしまった。父の没後，東大医学部第一内科医局が昔のお弟子さんの回顧談を載せた本が出版された。今回はその話の中からいくつか拾い出してみた。

1) Louis Pasteurに会った話

1889年に有栖川宮御夫妻のお供でパリに行った折り，普段は宮様のご用があるので，父は自分が興味を持つ病院や研究所に勝手に行く訳にはいかなかった。しかし，日本から遙々研修旅行の医師が来て頼まれれば，お暇を頂いて通訳傍々案内もしたようである。その中でも，パストゥール研究所などはやはり専門家（たとえば北里柴三郎博士など）でないと興味がないので，自然にそういう方たちと一緒に訪問したらしい。

父がパストゥールに会ったのは1889年の初めてのパリ滞在の時と，1892年のシャルコーのもとで神經病学を研修中の時と両三回位かと思われる。

最初の滞在の頃は研究所が前年に完成したばかりの時代である。丁度父が訪問した時，狂犬にかまれた15, 6歳の少年が担ぎ込まれてきて，パストゥールは患者にワクチンが注射されるのを傍らで見守りながら，父にワクチンの効果や予想される今後の経過などを順序立てて説明してくれたそうである。パストゥールは1868年に40歳台で脳卒中がおこり，左半身不随と舌がややもつれる状態であったが，頭脳はしっかりしていた。（写真1）

父が一番驚いたのはパストゥールの物言いである。初対面の東洋の一青年に対しても恰も同僚に対する会話のように，偉ぶることなく話すし，研究所の助手に対しても大変やさしい態度だったことである。

父が私に度々語ったことは，「本当に偉い人というのは態度や物言いがやさしくて，誰にでも親切なものだ。シャルコーもパストゥールもドイツの教授たちのように辯幅を飾らないよ。そして言うことが順序だっていて，無駄な事は言わないね。」これはあるいはフランス人とドイツ人の習慣や気質の差であるのかも知れないが，父が学生時代から憧れていたドイツ留学を切り上げて，シャルコーのもとに舞い戻った理由はここにあると思わ



写真1 パストゥールの70歳の誕生日、ソルボンヌの講堂に入るパストゥールは時の大統領に左手を抱えられている。原画はパストゥール研究所版のカード

れる。

二度目の訪問の時からは、言葉も楽になったためか、パストゥールだけでなく、ほかの研究員の人たちとも意見を交わしたようである。たとえばルー、Roux (Pierre Paul Emil, 1853-1933), シャンベルラン, Chamberland (Charles Edouard, 1851-1905), メチニコフ, Metchnikoff (Elie, 1845-1916) などである。

ルーは若い時には肺結核があったためか痩せて神経質な人だったが、84歳の長寿を保っていて、パストゥール没後は跡を継いで研究所長にもなっている。シャンベルランは細菌を濾過するフィルターを発明した人である。父が日本に帰国後、八戸地方の首下がり病の研究を行った時、この病気の病原体が馬から人に伝染する濾過性有機体と発表しているが、シャンベルランのフィルターのご厄介になっているのかも知れない。

この人たちの中で、父が一番興味を持って話をきいた人はメチニコフである。メチニコフはロシア生まれで、オデッサ大学の動物学の教授からパストゥール研究所に移って来た。大食細胞の発見者であり、ノーベル賞の受賞者でもある。ルーとは対照的な太った、話も文章もうまい人物である。しかし、外見とは異なって、その性格はかなり繊

細で、若い時はトルストイやローベルト・コッホとも中違いをしたり、自殺未遂もしたことがある。

後年（1919年）のパリ滞在から帰国した父はしきりにヨーグルトは長寿食だといって、私たちに毎朝食べさせた。これはメチニコフという偉い学者が勧めているものだと父は私たちに言い含めて、酸っぱいヨーグルトをたくさん勧めた。メチニコフはこの時既に亡くなっているので、友人のルーから聞いたものだろう。

2) ラ・サルペートリエルでシャルコーに師事

ラ・サルペートリエルとは火薬製造所の意味だが、近世になってホームレスや街娼の収容所になり、シャルコーが神経病学の講座を開いた後は世界一の神経病学の病院になった。シャルコー、Charcot, (Jean Martin, 1825-1893) は父がフランスに行った頃はやや最盛期を過ぎていた感があるが、それでも世界各国からの患者や入門希望者があふれ、なかなかアポイントメントが取れないほどだった。父は日本からの見学希望者の通訳として、初回のパリ滞在の時もラ・サルペートリエルを訪れている。しかし、ここに入門しようと決心したのはハイデルベルグ大学などで神経病学を聴講した後に、ドイツで最も尊敬していたベルリン大学のゲルハルト教授に将来は神経病学を専攻したいと相談したところ、同教授が即座にシャルコーを推薦、自分が紹介すると言ってくれた時なのである。

シャルコーの親友に日本美術の研究者ビュルティ、Burty (Philippe, 1822-1890) がいて、シャルコー夫妻にしきりと日本熱を吹きこんでいた。シャルコーの収集品には日本の美術品が多く、シャルコーが父に興味を持った背景には美術を通しての日本への興味があったのであろう。シャルコー夫人はなかなかの社交好きで、家庭での会食の常連にはドーデ Daudet (Alphonse, 1840-1897), ゴンクール、Goncourt (Edmond, 1822-1896)などの作者もいれば、ブラジル皇帝ペドロ二世などとも親しい間柄で、王様から贈られたオウムに『はらきり』という名前をシャルコーが付けている。シャルコーは親友のゲルハルト教授からの紹介もあり、日本趣味もある所へ日本からの留学生ということで、父はよい時期に入門したといえ



写真2 シャルコーの火曜講義 1887年のサロンに出品されたA. Brouilletの画シャルコーの右ババンスキー、シャルコーの左3人目はピエール・マリ

よう。

シャルコーは火曜日に公開講義を行い（写真2），その講義録が「火曜講義集」として出版されているが，講義の前，二週間は限られた助手と小人数で，講義で供覧する患者を徹底的に診察する。父は幸いこの助手に選ばれてシャルコーと親しくディスカッション出来る仲間に入れてもらった。シャルコーの得意な診断法はアウゲンブリック・ディアグノーゼ（瞬間診断）で，この言葉はシャルコーもドイツ語を使っていた。これは患者が室内に入つて来る動作を望診した時に閃く，第六感に近い診断で，カンのいい医者は案外よく当たるものである。シャルコーもまず瞬間診断をして，それを一応頭にしまっておき，二週間の綿密な診察の結果最終診断を下すのだという。この最終診断より瞬間診断の方が剖検成績とよく合致することが多かった。

父は良師に恵まれただけでなく，シャルコー門下の俊秀，なかでもピエール・マリ，Marie (Pierre, 1853-1940)，ババンスキー，Babinski, (Joseph, 1857-1932)などは遠来の留学生の世話をよく見てくれただけでなく，その後父のパリ訪問の時にも旧交を暖めている。ババンスキーは父がシャルコーのヌイーの別宅に晚餐に招待された時も同道してくれて，いわば父の兄貴分である。私が父から教えられた「ババンスキーの反射」は東大の診断学の先生から習った仕方と違って，かなり強く足の裏をこするもので，そうすると，見事な反射が見られるのであった。

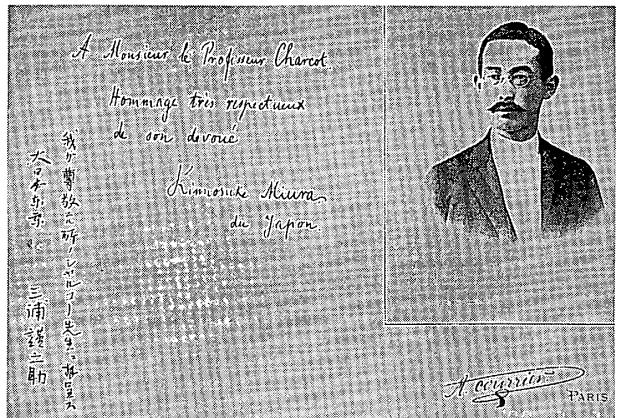


写真3 シャルコーへの感謝の手紙と父の写真

シャルコーの風貌は一見怖そうで，尊大な教授に見えるが，根はやさしく，父が出勤の途上，ラ・サルペートリエルの正門近くにさしかかると，後ろからシャルコーの馬車が近づき，乗つて行かないかと勧めてくれる。もうすぐですから，と遠慮しても構内は広いからと同乗させるのだった。父はこの話をする度に目を潤ませるのが常であった。

最近，シャルコー記念室から，こんなものが見つかった，と父の写真と父がシャルコーにあてた留学期間を通じてのご厚情を謝すというシャルコー宛の手紙が送られてきた。（写真3）シャルコーは父の帰国の翌年に急逝しているので，父は最後のお弟子さん一人といつてもよい。

シャルコーには夫人の連れ子のお嬢さんと自身の子の一男一女がいる。男の子のジャン・バチストは元来海に憧れ，商船学校に進みたかったのを無理に医者の見習をラ・サルペートリエルでさせられていた。ところが結婚問題で父のシャルコーと意見が合わず，食卓を別にするようになった。娘のジャンヌもまた結婚問題で父の反対にあい，これもまた食卓に姿を現さない。ついにシャルコーは夫人と二人だけで食卓を囲む始末になってしまった。こんな家庭の状態がストレスになって，軽い狭心症の発作がおきた。父が入門する2年程前のことである。

ラ・サルペートリエルのジャンの友人たちが心配して，病院でインターーンのパーティを開くから，シャルコーにご出席を，と頼んで来たのである。シャルコーはこのパーティでは大変ご機嫌で，あまり歌声が嬉しいので職員が行ってみると，戸口にシャルコーがシャンパンの杯を片手に立ってい

るので、びっくりして引き下がったそうである。このパーティのお陰で父子のわだかまりが溶け、ジャンには航海のための船を買ってやっている。

この時のシャルコーの自問自答の言葉と伝えられているのは次のようなものである。

[Pourquoi ne pas accorder à Jean-Baptiste un an de vagabondage marin?]

ジャン・バチストに一年間暇をやって海で遊ばせるのがなぜ悪いか？

このなぜ悪い？ Pouquoi pas？ が後にジャン即ちシャルコー提督（Commandant Charcot, 1867-1936）がアイスランドで探検中遭難死した時の船の名前としてフランスでは今も民衆の耳に残っている。

父はシャルコーから神経病学のみならず、ワインの貯蔵法やらパーティのメニュー作りの仕方やら種々の事を習ってきた。しかし Pourquoi pas？ という精神の柔軟性は習わなかつたようである。父は私に医者になることを強いた。私は医者になって「お父様と比べるとどうも…」と比較されるのを嫌った。しかし戦争必至の情勢に、軍医になれば身の安全が保証されると考えて医学部に入學し、父を喜ばせた。ところが戦争が終わってみると、東大の卒業生中、戦死者の率が一番高かったのは医学部で、他学部の数倍にも登っていた。軍医は安全というのは神話に過ぎなかつたのである。今、東大では戦没者の名を刻んだ慰靈碑建立の是非が問われている。誰も好んで戦死はしたい訳ではないのに、「戦死者のみの特別扱いは不当である」という議論に対してシャルコーのように記念碑を建立して何がいけない？ Pouquoi pas？ と私は言いたいのである。

3) 明治天皇の崩御

明治45年7月11日、東京帝大の卒業式が明治天皇の臨御を仰いで、例年のごとく行われた。父も廊下に列立して、陛下のお通りになるのをお迎えしたが、心なしか陛下はお疲れのご様子だったという。ご帰還後、検温してみると高熱なのと、ご様子がいつもと違っていた。侍医頭（じいとう）の岡玄卿博士が山県有朋侯にご重病のように拝察されるので対診者をご推薦頂きたい旨、希望を述べた。山県侯は石黒軍医総監と相談、東大内科の



写真4 右、青山教授、中央、岡侍医頭、左、三浦教授

青山教授と三浦教授を臨時に宮内省御用掛にして相談したら好かろうと言われた。これは偶然にもかつてのゲルハルト教授の門下生3人が揃つたことになる。（写真4）直ぐに参内せよといわれたが、父は何を着て行ったらよいかわからない。徳川時代の医師は坊さんと同じ扱いで、頭を丸めて法体だった。明治になると、侍医は鳥帽子、直垂でお寝間では入口から膝行して進み、また膝行して退出する。宮内省では今回は急なことだから、フロックコートでよろしい、とのことだった。

初めのうちはご病勢もさほどではなかったので、青山教授と父とは午前か午後交代で詰めていて、空いた時間は大学でも患者さんを診察していた。父が膝蓋腱反射を診ようとすると、陛下のお医者さんには足などお見せ出来ないという患者さんもいたそうである。そのうち、ご容態は深刻化して、父は泊まり込みになり、青山教授と1時間交代でご病室の固い絨毯の上を膝行するので、ズボンの膝が抜けてしまったという。

ご病勢が進み、肺炎の疑いもあるので、お背中に聴診器を当てようとしたら、お側にいる某将軍が「君主は背をみせるものではない」と遮るので果たせなかつた事もあった。父は「あの人の精神状態は尋常ではなかつた」と述懐している。しかし、呼吸困難に対してそれまで日本ではありません使われていなかつた酸素吸入をお勧めしたら、案外に直ぐ許可が出た。このことに憲りた父は大正になってから、ご健康に関しては侍医の立場を尊重するよう宮内省に申し入れをしたそうである。

父が定年になった時、侍医にならないかとのお

勧めもあったようだが、自分には同愛記念病院での大勢の患者さんを診ている方が向いているとお断りしたようである。しかし、たってのお勧めがあるので、宮内省御用掛という、常勤でない顧問のような事だけお引き受けしていた。

4) 野口英世と父

野口英世（1876-1928）は福島県会津の生まれで、父もまた福島市郊外の生まれである。会津と福島市とはかなり離れていて、旧藩も異なり明治維新の時、会津は幕府方だが福島は異なる。それでも福島県人会となれば他県の人とは全く扱いが違う。

野口英世は1915年に日本学士院から梅毒スピロヘータの研究で恩賜賞を頂いている。この時、父は学士院会員として熱心に受賞に尽力したようである。今と違って、その頃日本では野口に対してかなり強い反対をする人もある、野口は必ずしも追い風に乗っていたわけではないのに、父は反対を押し切った。私が何故ですか、と訊ねると父は言下に「福島県人だからさ。」と答えている。

勝沼精蔵博士（名古屋大学長）は三浦内科の出身だが、お若い時アメリカに行くにあたって、父が「あちらに行ったらぜひ野口英世博士を訪ね給え」と言って紹介状を渡し、「野口君は時間を正確に守る人だから、くれぐれも注意するように」と念を押したそうである。

さて、ニューヨークへ着いて早速アポイントメントを取ると「明日5時に」といわれた。勝沼博士は「常識的には午後5時のビジネス・アワーが終わった頃、セクレタリーが帰った後でゆっくり話をしようということだが、昼夜を問わず実験をされる人だから、ともかく午前5時に行ってみよう」と決心して、早朝のロックフェラー研究所に行ってみたそうである。そうしたら、野口は白衣を脱ぎながら入って来て、「丁度よかったです、長い実験が今終わったところだ。」と自らお茶を入れてくれたそうである。勝沼博士は三浦先生のご注意がなかったら会えなかつかも知れないと言っておられた。

私はこの話はよく出来過ぎているように思う。それはアポイントメントは秘書を通してなら、「Tomorrow, at five」とだけいうはずはない。

必ず午前か午後か未知の旅行者に対しては注意を与える筈だと思う。もう一つは金銭的にルーズな野口が時間だけは正確というのも考え難い。とかく偉人傳には後に尾鰭がつくものだから、この話を鵜呑みにしないで欲しいのである。

それでは父は時間に対してどんな感覚をもっていたかというと、大変せっかちで、鉄道の駅には列車の発車時間の30分前に行くのが常であった。旧日本の海軍では定刻5分前が原則で、早すぎてもいけなかった。父のような30分前は時間の無駄なのである。

5) 父の性格

1943年の2月のことである。私は海軍軍医として南方の部隊付きを命じられた。行先は海南島の海口に本部のある第十五警備隊で、台北まで行って海口行の空席を待つのだと言う。台北は別に軍の秘密の場所ではないので、父には海南島とはいわず、取りあえず台北に行きます、とだけ話した。そうしたら、父はもし台北で暇があったら台北帝大のK.Y教授をお訪ねするようにと紹介状を渡してくれた。私が「K太郎とは勇ましいお名前ですね」と言ったら、父は「お世話になる方だから知っておいた方がいい。」とお名前の由来を話してくれた。Y先生はYの木の下に捨てられていた赤ちゃんで、姓にはその木の名がつき、名は警察の人が丈夫に育つようにとK太郎と名付けたというのである。

さて台北に着いて、海口便の空席の有無を訊ねると、5日ほど待てば便があるとのこと、それならばと次にY教授をお訪ねした。戦地に行く途中だと、突然の来訪を詫びると、Y教授は「丁度よい折だから、あなたの知らないお父様の側面をお話ししましょう。」と次のような事を話された。

Y先生が東大医学部を卒業される前に三浦、入沢、稻田の3内科のどの内科に行こうか、迷っているとき、先輩や同級生から「三浦内科にだけは行くな。三浦先生は学者だけに、就職の世話などしてくれないよ。君みたいな天涯孤独の人の行く所じゃない。」と言われたそうである。しかし、自分は学問がしたくて東大に残るのだから、と敢えて三浦内科を選んでよかったと思う。それは入

局してみると、噂とは違って三浦先生は細かな心配りをして下さり、ロックフェラー財団に紹介して頂いたお陰でアメリカに留学もできた。しかも留学期間が終わって、「ヨーロッパを回って帰国するつもりです」と三浦先生に手紙を書いたら、「何かと要るだろう」とお金まで送って下さった。「留学中に溜まりましたからとご返金申し上げましたが、噂と実際とは大変な違いでした」と言われる。実は私も戦後ロックフェラー財団の給費生でアメリカに留学、帰りにヨーロッパに回ったが、父はすでに亡くなっていたので、もちろん送金もなかった。

父は学者肌と言う評判があり、宴会などでもあまりお酒も過ごさず、唄も歌わずにいるので、人情にうとい人という評判はあった。しかし、大震災後、出入りの職人などで焼け出され復興資金に困っている人には、かなり融通していたそうである。父を外見だけで判断しては気の毒である。

父は小説家が嫌いであった。「嘘を書くから」というのが理由である。これはある医師でもあり、文豪でもある人の作品に、モデルとして父によく似た人物が出てきて破廉恥な行為をする小説があり、大変迷惑を蒙ったことがあって、それ以来小説家と新聞記者が苦手になった。反対に画家などの芸術家には親近感があるらしい。父の肖像は今、東大の内科講堂にかけてある。黒田清輝画伯が画

いた洋画のほか、鏑木清方画伯の画いた日本画の掛け軸もある。(写真5) 黒田画伯が父の自宅に来て描かれた時、私はまだ子供だったが、側で見ていてよろしいといわれたので、よく覚えている。父と黒田画伯は青春時代を過ごしたパリの町のことなど懐かしそうに話していた。鏑木画伯の時は(1943年)、私は戦地にして知らないが、この時も大変話がはずんだと聞いている。

父が在学した頃の東京大学の医学部は教養課程もドイツ語だけだから、日本の文化は何一つ習わずに卒業して、シャルコーのもとで逆に日本の絵画や陶磁器の素晴らしさを知ったのだった。父はこのことに発憤して、中年の頃から日本の文化に興味を持ち、自学自習をしたのだった。医師は若い時は医学の知識だけでも事足りる場合もあるが、中年になって往診にでも呼ばれると教養の有無がはっきり分かるような場面にも直面する。父の時代は病院での検査よりも、プライベートの患者さんの家庭まで医師が往診する事が多かった。自然に患家人たちとの会話も多く、お医者さんの教養の有無が信用にも繋がってくる。そのため父は土曜、日曜などは医学書は読まずに、若い時に習わなかつた一般教養の勉強をしていたようである。

私は父が政治好きの政医でもなく、お金もうけのうまい金医でもなく、世間知らずの学医と呼ばれる世間の噂を喜んでいる。世間知らずかどうかはよほど身近にいないと分からないものである。

6) 父の晩年

私の母は私が小学5年の時に亡くなり、以来父と書斎も寝室もともにすることになった。夜中の往診依頼の電話も私が取り次ぎ、老齢の父がどんな顔をして往診に出かけるかまで知っているのは私だけである。父は「臨終になってから私を呼んでももう遅いよ」と言いながら真夜中の往診に出かけて行くのだった。

私が戦地から帰ってみると、父の家は占領軍に接収され、父の部屋だけは許されて、窓から出入りしていた。腰痛に悩まされた毎日だったが、若い時からの習慣だった近着の専門雑誌をトイレの中で読むことは1日も欠かさなかった。同じく接収された同愛病院の図書室から米軍の特別許可でアメリカの新着雑誌を借りるのである。こうして



写真5 鏑木清方画伯筆の三浦謹之助像

得た、クサイが新しいニュースを東大内科の抄録読会で紹介するのが唯一の楽しみだったようである。

こうした毎日突然飛び込んで来たのが文化勳章を下さるという朗報であった。父は「占領軍は家も病院も持って行ってしまったが、私の頭の中までは持って行けなかった。文化勳章は私の頭にしまってあるものに対して下さったものだ。」と変な理屈をつけて子供のように喜んでいた。

父は80歳を過ぎるまでは人前で涙を見せるよう

なことはなかった。しかし、脳血管の硬化が進んだためか、だんだん涙脆弱くなり、故郷の信夫文字摺り（しのぶもじすり）の話、シャルコーに馬車に同乗を勧められたことなど話す時は必ず目が潤む。文化勳章受章のお祝いの手紙をもと東大の学用患者であった筋ジストロフィーの患者さんから頂き、それを読み上げるうちにお祝いの壇上で絶句してから、間もなく脳卒中で亡くなってしまった。

あとがき

千葉医学に2年間にわたって連載してきた「20世紀のわが同時代人」もこの号で終わりになる。はじめは、私自身が話を交わしたことのある、20世紀に活躍した生化学者の事績を紹介したくて書き始めたものだった。しかし、じきに種切れになり、「わが師友」に主題がうつり、医学とは縁のない文学方面の方々の話になって、「千葉医学」の貴重な紙面を汚すことになった。これは、寄稿当初の中島編集長の大英断でカットなしで、ご採用頂き恐縮した。考えてみれば世間というものは種々な職業の方から「同時代人」が構成されていて、医学と無関係でも私個人には大きな影響を受けている方々が多い。

読者の中にはこの原稿を本当に愛読して下さる方が予想外に多く、私が千葉大学に赴任する以前の卒業生の方からも、また私の退職後の若い卒業生の方からも多くの声援を頂いた。硬い文章の多い紀要の合間にこのような駄文もあるいは必要なのかも知れない。

このシリーズを書く傍ら、杏林書院からの依頼で、化学や生物学を履修しなかった、医学生のための生化学教科書を執筆した。その中にKrebsやCori、或いはKornbergなどの人柄を、このシリーズの中から短く抜粋したところ、一風変わった教科書ができあがった。このシリーズのお陰である。

20世紀の最後の2年間には私の身上にも色々の変化がおきた。2年前にはテニスが出来たのに、いまは腰痛のため、歩くことさえ充分にはできない。以前には、現代語になおして頂くのが主な仕事であった橋本洋子さんの仕事が、いまはもっと生化学の内容にまで立ち入って精細に読んで頂かないと矛盾に気がつかないことさえある。

老いとは怖いものだから21世紀の曙を目前にした今、このシリーズを閉じることにしよう。永年のご愛読を感謝する次第である。

2000年12月